

見城悌治編

『婦一協会の挑戦と洪沢栄一』

——グローバル時代の「普遍」をめざして』

(ミネルヴァ書房・二〇一八年)

高橋 原

婦一協会（明治四五年結成、昭和一七年解散）はその中心に錚々たる財界人・知識人たちの名前を連ねて結成された団体である。名称は王陽明の句「万徳婦一」に由来する。「論語と算盤」の合一を説く実業家洪沢栄一がスポンサーとなり、宗教統一の理想を掲げる教育家成瀬仁蔵の情熱を駆動力として結成されたが、調整役となった宗教学者姉崎正治のもとで、実践的な運動体としては華々しい成果を収めなかったものの、学術文化交流団体として一定の成果を残した。以上が婦一協会についての通説的な理解であろうか。本書は本邦で初めてこの団体を本格的に取り上げた研究論文集である。婦一協会は、近代日本宗教史の文脈では、同年の三教会同に続いて生じたものとして言及されてきた。また、日本女子大学創立者である成瀬仁蔵や、日本の宗教学のパイオニアとしての姉崎正治の伝記的研究においては、彼らの生涯と業績を補完的に彩る一挿話として扱われてきた。婦一協会を正面から取り上げた数少ない先行研究には、成瀬研究の流れでは中島邦、姉崎研究の流れでは筆者（高

橋原）によるものがあつたが、研究対象としては長らく忘れられた存在であつた。

そのような中で、洪沢栄一記念財団の支援によるシリーズ出版『洪沢栄一と「フィランソロピー」』（全八巻）の第二巻として編まれたのが本書である。次に目次を掲げる。

序章 見城悌治「婦一協会とは何か」

第一部「近代日本における「宗教」／「道徳」と婦一協会」

第一章 桐原健真「宗教は一に帰すか——婦一協会の挑戦とその意義」

第二章 沖田行司「宗教統一論と国民道徳——三教会同から婦一協会へ」

第三章 姜克實「浮田和民の婦一理想——婦一協会との関わりにおいて」

第四章 町泉寿郎「漢字から見た婦一協会——服部宇之吉の「儒教倫理」と日露戦後の国民道徳涵養」

第五章 見城悌治「精神界」の統一をめざして——洪沢栄一の挑戦」

コラム1 是澤博昭「シンドニー・L・ギュリック」

コラム2 木村昌人「森村市左衛門」

第二部「グローバル化のなかの婦一協会」

第六章 酒井一臣「澤柳政太郎のアジア主義——婦一協会講演録を中心に」

第七章 辻直人「成瀬仁蔵の婦一思想——その形成過程お

よび欧米への発信」

第八章 岡本佳子「初期婦一協会の国際交流活動と宗教的自由主義——成瀬仁蔵・姉崎正治の活動と米国ユニテリアンを中心に」

第九章 陶徳民「「一等国」を目指す有識者グループの努力と限界——デューイから見た大正日本と婦一協会の人々」

第一〇章 山口輝臣「婦一」というグローバル化と「信仰問題」——姉崎正治を中心に」

コラム3 岡本佳子「婦一協会に賛同した欧米の人士たち」

コラム4 見城悌治「婦一協会例会で講演した人たち」

付録 婦一協会関係資料

各論文の概要は次の通りである。

見城悌治による序章では、婦一協会についての先行研究が乏しい現状、婦一協会結成の経緯、主要会員と会合、出版活動等について、基本情報が提供される。

第一章（桐原論文）は、婦一協会の設立は大逆事件後の社会情勢における国民道德の補助機関として理解できるという視点を提示し、宗教統一運動としては同床異夢の理想論に終わってしまったものの、宗教の婦一の限界を早く悟り、諸宗教協働の場を提供したと評価する。

第二章（沖田論文）は、内務省主導であった三教会同の影響圏に婦一協会の設立を位置づけ、『六合雜誌』に見える論調等を素材に、宗教婦一の理念が宗教界で支持を得ることなく、運動体としては役割を果たさずに、ただその後の国際社会への働きかけの足場となったことを示す。

第三章（姜論文）は、協会創設時の幹事であり、「倫理的帝国主義」を唱えた浮田和民を通して、文明化、世界化の趨勢への順応認識、宗教信仰からの超越、人生・社会問題への視野という婦一協会の三つの組織原則を指摘し、これらの知識人的な理想はかえって婦一協会の影響力を限定的なものにしたと論じる。

第四章（町論文）は、協会主要会員の中で唯一の儒教研究者であった服部宇之吉を取り上げる。三島中洲の義利合一論を引き継いだ洪沢の儒教理解と、服部の説く文部省の政策と一体化した儒教倫理のあいだに存在した微妙な齟齬が指摘される。実現はしなかったが、婦一協会が胚胎していた儒教的方向性を示唆するものとなっている。洪沢の「論語と算盤」論と協会の理念をつなぐ、この方面が初めて論じられたことは有意義である。

第五章（見城論文）は、洪沢が実業界引退の際に表明した課題を検証し、宗教統一運動というイメージにこだわると、洪沢の「真意」を捉えそこなうと指摘している。国内の労働問題などとともに国際社会の安定も見据えて「精神界の事」に尽力したいというのが洪沢の一貫した思いであり、そのための媒体と

して存在したのが帰一協会であつたとされる。

第六章（酒井論文）は、設立当初からの会員であつた澤柳政太郎の「文明国標準」に基づくアジア主義を、「国家本意の国際主義」であつたと性格づける。教育行政畑を歩み、東北、京都で帝国大学総長となり、宗教教育にも強い関心を持ち続けた澤柳は、帰一協会の典型的な会員像の一つを示しているとも言えるが、本章で紹介されている帰一協会講演録と質疑応答では、澤柳の主張が必ずしも会員のあいだで好意的に受け入れられなかったことが示される。

第七章（辻論文）は、新発見史料に基づいて成瀬の帰一思想の形成過程を考察している。成瀬仁蔵とシカゴ大学教授バートン（聖書学）との間に交わされた書簡、バートンによる諸大学教授への紹介状は、成瀬が米国で帰一協会への協力者を求めて展開した活動とそれへの反応の実態を解明するための基礎史料として貴重なものである。

第八章（岡本論文）は、成瀬、姉崎を経由して米国に伝えられた帰一協会の動向が、ユニテリアンの宣教師たちにどのような反応を呼び起こしたのか、また、彼らと協力関係を結ぶことに姉崎が極めて慎重な態度を崩さなかったことを、英文書簡資料等を用いながら丹念に跡付けている。神智学協会との交流についても触れられており、当時の自由宗教運動の提唱者たちの活発な動きとともに、それらの運動が各国内に根を下ろすための受け皿を見出し得なかった状況を、帰一協会の行

く末と重ね合わせて読み取ることができる。

第九章（陶論文）は、米国帰一協会の発起幹事でもあつた教育学者デューイが、文歴史的視座から日本の近代化をどのように捉えていたかを論じている。デューイが慨嘆した排日移民法の成立（一九二四）は、両大戦間の国際親善・日米協調に心を砕いていた洪沢をはじめ、デューイと親交があつた協会会員にとつても大きな関心事であつたが、本論文は、帰一協会の面々が共有していた国際感覚とはどのようなものであつたかを米国人の目を通して垣間見せるものとなっている。

第一〇章（山口論文）は、帰一協会が宗教家に参加を呼びかけなかったことなどから、この団体が宗教の帰一を目指したものでなかったと指摘する。「帰一」とは世界が一体化しつつあるというグローバル化に関わる問題意識であり、「宗教」は、その問題への対処を検討するための最初の手がかりとなつた日本 の得意分野であつたに過ぎないと論じる（事実、帰一協会の研究課題は「信仰問題」から「時局問題」へと移行していく）。そもそも会の中心を担つた姉崎が宗教の帰一という理念に冷淡な「異分子」であり、姉崎が求めていたものは「帰一」というグローバル化の根底にあるはずの宗教的な何かであつたと指摘している。

これらに加えて四つのコラムでは、結成当初から協会に加わりながら注目されてこなかつたアメリカンボード宣教師のギューリック、洪沢とともに資金提供者となつた実業家の森村市

左衛門、成瀬仁蔵の呼びかけに賛同した欧米の知識人たち、月例会で講演を行なった人々について、帰一協会の活動との関わりを中心に情報がまとめられている。また、巻末付録には帰一協会の設立趣意書や決議、宣言等が「帰一協会関係資料」として収められている。

筆者はかつて帰一協会の研究に手を染めたが、それは姉崎正治の伝記の一頁を埋める作業の副産物のようなものであった。そこで際立ったのは、宗教の帰一という理念を掲げて邁進しようとする実践家成瀬の情熱と、あくまでも宗教の相互理解の補助にとどまろうとする姉崎の、宗教学者らしいとも言うべき抑制的態度との対照であった。この姉崎が活動の実務を担ったために、帰一協会は、万国宗教会議（シカゴ、一八九三）を受けて実現した宗教家懇談会（一八九六、三教会同（一九一二）、御大典記念日本宗教大会（一九二八）といった宗教協力史の系譜の中に位置しながらも、そのような趣旨の運動としては不発に終わった。すなわち、いわば挫折した宗教協力運動というのが帰一協会を捉える一つの視点であった。また、成瀬、洪沢の没後も、帰一協会が姉崎正治のもと、東京帝国大学宗教学研究室に事務局をおいて細々と活動を継続し、最終的に昭和十七年一月二〇日の総会をもって解散したことを確かめることができたが、関東大震災以降の史料が乏しく、活動の実態解明には課題も残した。

今日あらためて帰一協会を研究対象として取り上げる場合に期待されることの一つは、従来の成瀬、姉崎などの主要人物に焦点を当てる研究視座をどのように超えるのかということである。まず、本書は浮田和民、服部宇之吉、澤柳政太郎、ジョン・デューイという、会の活動からすると協役的な人物たちの役割と参加の意図について光を当てるものである。これによって帰一協会が一つの統一的な運動体ではなく、多様な思惑と言説が飛び交う（しかし着地点のない）「場」を提供するものであったことを、より多面的・立体的に示したと言える。そして、帰一協会を宗教という狭い枠から解放して評価する視点を提供したといえよう。

その際にきわめて重要なのが、本書の副題に掲げられている「グローバル」という観点である。帰一協会が英文紀要を発行し、成瀬や姉崎が欧米に向けて一定の働きかけを行なったことは知られていたが、彼らの発信がいったい誰にどのように届いたものであったのか、史料的な裏付けとともに示したことは重要である。「世界文明の将来に資せん」という帰一協会の意見書の文言は決して空虚なスローガンであったのではなく、彼らが国際協調に本気で取り組もうとしていたことが明らかにされた。これは、洪沢栄一のフィランソロピー活動を明らかにするという本書の目的に適うことであろう。もちろん一方で、海外のカウンターパートとなったのが少数派であるユニテリアン中心であったことは、具体的な成果を望み得なかったという限界

を裏書きするものでもあるのだが。

本書の諸論文は確かに、婦一協会の全体像を把握するための有効なアンカーを何本も打ち込んだと言える。しかし、それによって活動の多面性が強調されたものの、必ずしも、固定した輪郭が浮かび上がったということではない。婦一協会は、洪沢をはじめ、多方面で活躍する人土たちが月に一度立ち寄ってはそれぞれの方向に去って行くステーションのようなものでもあった。海外のユニテリアンとの連携を模索する会員がいる一方で、井上哲次郎のような保守主義者も結成当初から同じテーブルについていたことを想起すれば、彼らが同じ目的地を共有する隊列を組み難かったのは言うまでもない。その点、随所で指摘されているとおり、本書は婦一協会の「場」としての存在意義を評価するものである。

では、婦一協会がコアのない空間に過ぎなかったかというところではない。あらためて巻末付録の月例会記録を見渡す時、一九二四年まではほとんどの会合に洪沢栄一の臨席が確認され、洪沢が単なる資金提供者ではなかったことがわかる。協会が宗教教育や時局問題に関する決議文を公表し、出版活動も行なったということも考え合わせると、婦一協会とは、洪沢栄一が設置したシンクタンクであつたというのが、少なくともその出発点において、もつとも等身大に近い形容であるといつてよいのではないか。すなわち、多面的で輪郭の不明瞭な広がりを持つ婦一協会の活動は、そのコアに洪沢の抱いていたヴィジョンを

据えてはじめて理解可能なものとなる。その意味で、本書が宗教を焦点化せずに、洪沢栄一とフィランソロピーというテーマのもとで編まれたのは理に適つたことであつたと言える。

本書編者の見城は、婦一協会の挑戦が「未完」に終わったことを強調している（一二二頁など）。これは当時の時代的制約の中では世界のどこにも着地点を見出し得なかつた婦一というヴィジョンが有していた可能性の豊かさを示唆する表現でもある。婦一協会は一時的に盛り上がつて自然消滅していった宗教統一運動の徒花のような外見をしているが、そのヴィジョンのポテンシャルにおいて、まだ再評価の余地を残しているというのが、本書が教えていることではないだろうか。

最後に、本書が海外大学のアーカイヴに保存されていた新資料を活用し、従来知られていなかった婦一協会の活動を、広がりと共に奥行きを持ったものとして描き出したことを高く評価しつつ、協会の基幹的活動についてさらなる説明を期待したいというないものねだりを書いて結びとしたい。まず、婦一協会の活動を知るための基本資料は、洪沢青淵記念財団竜門社編纂『洪沢栄一伝記資料』第四六巻第七款「婦一協会」（四〇六―七三〇頁）であり、これは本書でも十分に活用されている。しかし史料の性質上、洪沢の没後については手薄であるので、昭和期の活動状況を知るためには不足がある。それを補う一例として、例会の講演内容の抄録である「婦一協会紀要」という謄写版刷りの冊子が存在する。佛教大学浄土宗文献室所蔵の矢吹慶輝

（姉崎の弟子であり帰一協会会員でもあった）旧蔵遺品の中に、昭和一四年三月までの『紀要』が含まれている。これを参照すれば、本書巻末付録では昭和八年で途切れている月例会記録をより充実させることができたであろう。いまだ行方知れずの『帰一協会会報』の欠号など、この類いの散逸史料は国内外にまだまだ眠っていると思われるので、引き続きの蒐集と保存、公開を期待したい。他にも、『帰一協会叢書』全十巻や、小冊子『時局論叢』全三冊など、活字となった出版物の成り立ち等についても、これまでに研究されてこなかった。自分がそれをしていまま、からめ手から攻略する前にまずは正政法を尽くすべきなのではないか、という不満を述べるのは無責任なことであるとは承知しつつ、未来の帰一協会研究に期待して筆をおきたい。

（東北大学教授）

赤澤史朗、北河賢三、黒川みどり、戸邊秀明編著
『触発する歴史学——鹿野思想史と向きあう』

（日本経済評論社・二〇一七年）

萩野 富士夫

一 鹿野史学に一貫するもの、転回するもの

「戦後歴史学の第二世代」として一九六〇年代に民衆思想史を確立した鹿野政直は、現在に至るまで「近代」「民衆」「国家」、そして「日本」のありようを内在的に論じつづけてきた。その多彩かつ膨大な著述と社会的な発言・行動は歴史研究者にとどまらず、多くの人びとに新たな問題領域の所在を示すとともに、それらの解決に立ち向かった「個性」の強靱で独創的な思索と行動を通して変革への希望を指し示してきた。文字通りの「触発する歴史学」を体現する存在でありながらも、個々の領域での評価や批判とは別に、その半世紀以上におよぶ鹿野史学総体の本格的な検証はこれまでなされてこなかった。

この未踏の課題に日本現代思想史研究会の参加者らが共同研究として取り組んだ成果が、本書となった。黒川みどり「鹿野思想史と向きあう」を序説とし、第一部「鹿野思想史の成立と方法」は三つの論文、第二部「鹿野思想史の焦点／その問題